町史とっておきの話 303

民具〈知識の容れ物〉としての書物

―〝書物の郷〟只見町での書物調査フィールドワーク①―

早稲田大学非常勤講師
久野（ひさの） 俊彦（としひこ）

▼長らくご愛読いただいた「町史とっておきの話」は今回の連載で終了します。

▼連載の最後を飾る執筆者は久野俊彦先生です。これまで3回連載されましたが、そのたびに新しい発見がありました。今回は只見町に残る古い書物が全国的にみてたいへん価値の高いものであることを解説していただきます。

書物の郷・只見

愛知県内には、真福寺大須文庫・蓬左文庫・岩瀬文庫など、名高い文庫があるため、多くの古典籍が存在します。そのことを、阿部泰郎龍谷大学教授は〝書物の王国〟と言っています（『愛知県史 別編 文化財4典籍』「あとがき」二〇一六年）。〝書物の王国〟があるなら、〝書物のマチ、書物のムラ〟があると私は考えています。それは、奥会津地方の村落に多くの書物が存在しているからです。

私は二〇〇三年ごろから奥会津地方、とくに只見町で古典籍を含む書物の調査を続けています。その過程のなかで、村落には中世から近世にかけて多くの書物が存在していることが明らかになりつつあります。

古典籍・書物の歴史は、おもに都市やその近郊の寺社聖教典籍、貴族・大名の文庫、蔵書家、書店・貸本屋の資料から研究されてきました。しかし私は、村落の書物を探すフィールドワークを続けることが、書物の歴史をたどる旅だと考えています。〝書物の郷〟を考えることで、日本の村落にはこんなにも古典籍があると言いたいのです。

只見町での民具と書物の収集

一九六五年（昭和四〇年）ごろからの農業の機械化などによって、農具が廃棄されていく中で、消滅の危機を感じた只見町の町民は、公民館の事業として民具の収集に努めてきました。一九六九年（昭和四四年）の集中豪雨による集落の移転や、只見ダム建設にともなう一九八三年（昭和五八年）の石伏集落の移転では、それらの集落から民具が収集されました。民具の使い方や作り方をよく知る町民が、収集された民具の記録化にあたるという「民具記録の只見方式」は、民具学で有名になりました。二〇〇三年（平成一五年）には「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」として、約二三〇〇点の民具が国重要有形民俗文化財に指定されたのです。

民具収集の過程で、たくさんの書物が収集され、石伏集落の書物を中心に只見町教育委員会に保管されています。近世史における古文書調査の過程では、村落の書物はほとんど注意されず、書物の収集や調査があまりされてきませんでした。しかし、只見町では書物が民具として収集されてきました。

知識の容れ物としての書物

民具としての書物の議論は、書誌学者の大沼晴暉氏が指摘していました。大沼氏は、『民具研究ハンドブック』（一九八五年）の「民具と図書」において、図書（書物）の書誌学的な把握は、いわば民具の形態・編年・機能把握に等しく、写本から刊本への変化は、自製民具から大量生産への変化にも比せられ、一点の図書の著録は、博物館や資料館での一点の民具を資料化する作業である、と述べました。しかし、大沼氏の見解はその後の民俗・民具研究に生かされたわけではなく、書物を民俗資料・民具として扱う研究はほとんどなかったのです。再び大沼氏は、民俗学・考古学では物・物質文化を広く集めて比較検討するのであるから、知識やことば、そしてその容れ物である図書（書物）は、一つの物、物質文化であり、図書もまたもっとも古くからの民具の一つではなかったか、と述べています（「書誌学と民俗考古学」『図説 書誌学 古典籍を学ぶ』二〇一〇年）。

こういう指摘があったことを考えると、一九八〇年代に只見町で書物が民具として収集されてきたことは画期的なことでした。村落での端本（たとえば全五巻のうち一巻だけ残るもの）の書物は、一点だけでは意味をなさないかもしれませんが、それらを地域に共有された総体としてとらえ、同類資料を収集・比較して、製作された書物の形態と技術、その機能・象徴性と変遷、さらには人々の生活との関わりを明らかにしてゆくことは、モノとしての書物を通した民俗・民具研究といえます。

▲民具とともに集められた石伏区の書物274点